

今、振り返る教師としての原点

私を育てた
あの時代、あの出会い

激論を交わした日々が 学年で指導する意味を教えてくれた

北海道札幌新川高校

中井勝広

教師として経験を積み積むほど、確固たる信念が築かれ、周りの意見を受け入れづらくなりがちだ。それはともすれば、指導の停滞を引き起こす。学年団で徹底的に議論をしたことによって学年全体の指導が変革し、生徒の信頼を得ていった日々を中井先生が振り返る。

反論も受け入れる深い度量



教職10年目に
札幌旭丘高校に
赴任しました。

初めての進学校勤務でいきなり1年生担任となり、その学年団で副主任だったのが佐々木高至先生です。

同校で初めて担任を持つ先生ばかりの学年団だったので、何でも意見を出し合いながら指導しました。正解が分からず、だからこそ議論が白熱することがありました。佐々木先生は何事も生徒中心で考える先生だと感じました。進学実績の数字や教師の上下関係などを考えて意見を言いがちな場面でも、「生徒のためになることは何か」と

常に問われていたからです。

その学年団で個人は納得のいく指導が出来ず、生徒の進路希望をあまりかなえられませんでした。次こそ生徒の夢をかなえさせてあげたい。そのために、佐々木先生とまた一緒に学年団をつくりたい。他の先生も同意見で、卒業式後の懇親会で佐々木先生に「皆で担任希望を出してください」と直訴しました。もちろん人事を決めるのは校長です。でも、そう言ってしまうほど次にかける思いがありました。

2回目、念願かなって佐々木主任の下で担任となりました。先生方の思いは熱く、「学年団全員で320人の生徒を見る」という学年団の方針の下、

最初から本音をぶつけ合いました。

佐々木先生に「それは違う」と反論をしたこともありましたが、非難されることはなく、「複数の人間がいれば、意見も複数なのは当たり前」とかえって議論が深まりました。そうして互いをさらけ出し合ったことが、チームワークを高めました。教科指導でも、模試の結果から「英語の課題量を抑え、落ち込んでいる数学の課題量を増やそう」と提案があると、英語科担当が課題量を調整するだけでなく、生徒に「数学を頑張ろう」というなど、足並みがそろいました。

佐々木先生が先生方に適役を与えて盛り立てるのがうまくいったことも、学年団が結束できた要因だと思います。私は1・

2年生で生徒指導を担当しました。

勉強が出来ても、ゴミ箱の放置やだらしない服装などを決して許さない私が担当になったことで、学年団にも生徒にも規律正しさが浸透したと思います。また、3年生で初めて進路担当をした時、私の分析を基に生徒の志望校を決める重責に耐えきれなくなりそうでした。佐々木先生はそれを察してか、「中井先生が言うなら間違いない。これでいきましょう」と言ってくださり、私は他の先生に自信を持って提案できました。

学年団で方針も情報も共有されてきたことは、何より生徒に良い影響がありました。生徒を叱る時も進路を助言する時も、どの先生も同じ対応をするた

先輩教師の言葉

新たな経験こそが
人を成長させることを
次代に引き継ぐ

北海道札幌旭丘高校 校長
佐々木高至



中井先生たち
に「次の学年主任をしてください」と

言われた時には本当に驚きました。程なくして教頭から学年主任を打診され、その理由として「推薦者が多い」ということを聞き、うれしく思うのと同時に覚悟を決めました。

中井先生は、生徒に対して私と同じような思いを持っていて感じました。例えば、生徒が職員室に挨拶もなく入って来た時は、私が注意する前に、既に中井先生が叱っていました。当たり前のことを当たり前に指導できる。そんな先生と一緒に働けることを頼もしく思いました。

3年生で中井先生を進路担当としたのは、本人は驚いていましたが、私は適任だと

左 ささき・たかし 数学科。北海道札幌平岡高校、札幌旭丘高校などを経て、札幌平岸高校定時制で教頭、札幌新川高校で教頭・副校長、札幌平岸高校で校長を務める。その後、札幌旭丘高校へ。校長。

右 なかい・かつひろ 英語科。北海道札幌篠路高校（現・札幌英藍高校）、名寄工業高校（現・名寄産業高校）を経て、札幌旭丘高校に11年勤務。その後、札幌新川高校へ。進路指導部長。

撮影◎札幌旭丘高校にて



徳が人を引き付ける

ミドルリーダーとして学年・

め、生徒は安心して、教師を信頼するようになったのです。生徒から「先生たち、仲が良いですよ。後輩から先輩の学年がうらやましいと言われました」と聞いたこともありました。教師がまとまれば、生徒は教師を好きになる。それを実感しました。

分掌を引く張る立場になり、最も大切にしている言葉は「徳は孤ならず、必ず隣あり」です。札幌新川高校で当時教頭だった佐々木先生から初めての学年主任を命ぜられ、思うように学年を動かさずに苦しんでいた時に先生からいただいた言葉です。思えば、佐々木先生の隣には大勢の先生や生徒が集まっています。先生に「徳」があるから

だとすれば、それは何か。先生は生徒に進路アンケートを取った時、担当者を手伝い集計を終えてから、自分が担当する数学の添削を学校に遅くまで残ってされていた。生徒指導が全ての指導の基盤になると、生徒が嫌な顔をしようとも、甘い姿勢を少しも見せませんでした。生徒のため、学年のために重要だと思ふことは、毅然としてそ

れを貫く。だから、周りの人は信頼し、付いていくのだと感じました。佐々木先生の仕事ぶりをそばで見て、そして仕事を任せられ、私は教師として成長できたと思います。ならば、後から来る先生方に自分は何が伝えられるのか。自分を高める努力を続けながら、その答えを考え、そして実践していきたいと思ふます。

思つて頼みました。というのは、その学年の1・2年次に、中井先生が中心となって行った模試分析の結果と立案された学年全体の学習計画を見て、中井先生はデータから生徒の弱点を読み取り、対策を立てる方に優れていると分かっていたからです。

札幌新川高校では、中井先生に赴任2年目で教務副部長を、3年目で学年主任を、いづれも中井先生が初体験の仕事で「私を恨んでもいいからやれ」と任せました。実は私自身、そうやって先輩に育てられてきました。新しく赴任してきた先生ばかりが担任という学年団を任せられたり、自分も含め経験者が誰もいない中で進路指導部長を務めたりするなど、難しい役を命ぜられてきました。しかし、結果的に経験が積み上がり、自分の成長につながっていたのです。私が「経験がものを言うのだ」と言つて新しいことを命じるのは、私もそうして挑戦する機会をいただき、教師として鍛えられたと思うからです。人は任されて育つことを中井先生も感じ、後輩に同じようにして経験を引き継いでいくとすれば、こんなうれしいことはありません。

*プロフィールは2014年3月時点のものです